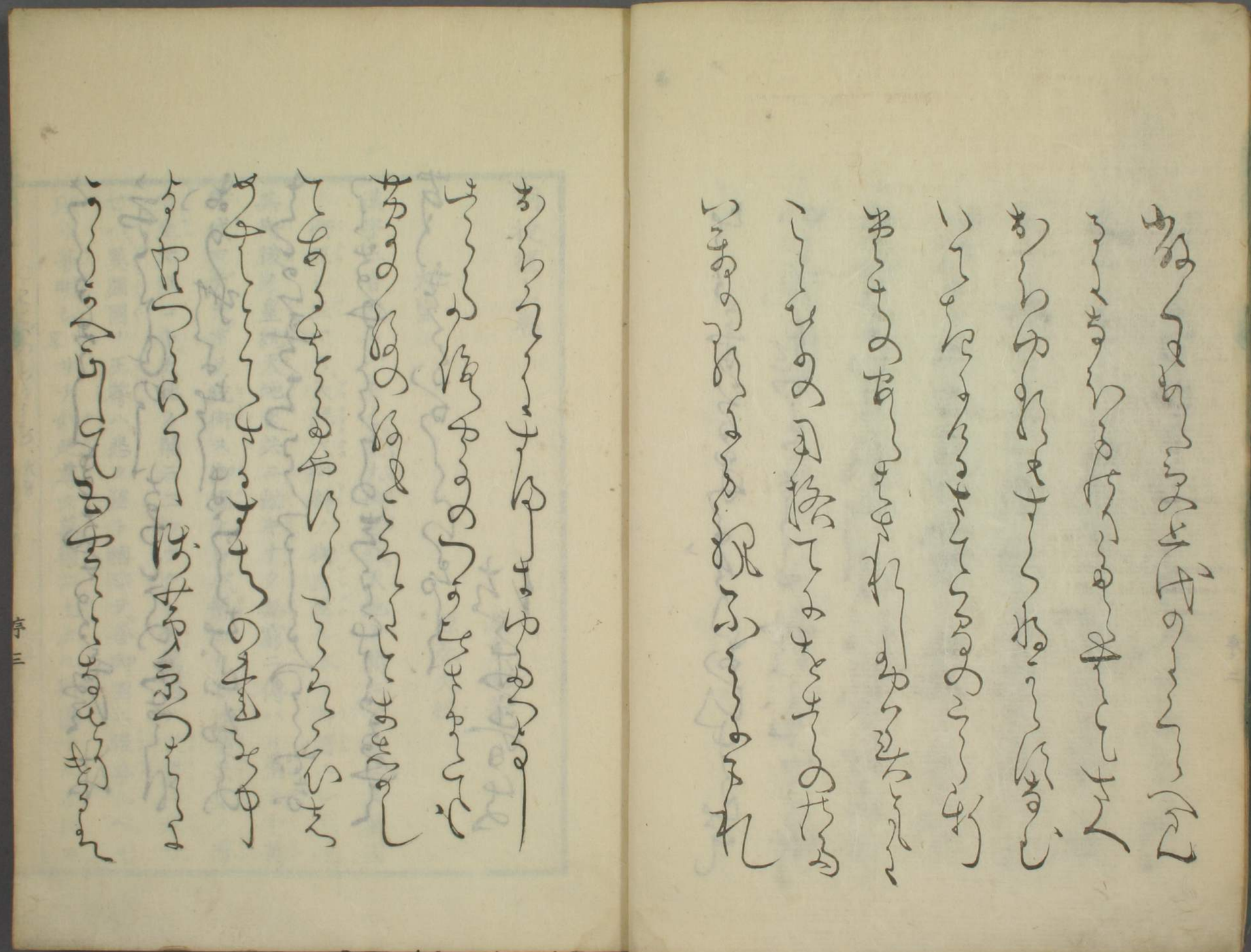
ホ 2
4853
1

門水2
4853
巻 1

三橋氏蔵書印

嘉蔵書軒文庫

昭和十九年三月二日
小田寿夫氏
長男友右
御氏寄贈



詞捷徑上巻

源重儔著
源春夫校

大旨

漢字三音考ふいくく。皇大御國ハ。天地ノ間ニアラユル萬國ヲ御照シ坐マス。天照大御神ノ御生坐ル本ツ御國ニシテ。卽其御後ノ皇統。天地ト共ニ動キナク無窮ニ傳ハリ坐テ。千萬御代マデ天下ヲ統御ス御國ナレバ。懸マク乇可畏天皇ノ尊ク坐マスコト。天地ノ間ニ二ツナクシテ。萬國ノ大君ニ坐マセバ。異國國ノ王等ハ。悉ク臣ト稱ジテ。吾御國ニ服事ルベキ理リ著明シ。中畧サテ如此尊ク萬國ニ上タル御國ナルガ故ニ。

方位モ萬國ノ初ニ居テ。人身ノ元首ノ如ク。萬ノ物ノ事モ。皆勝レテ美キ中ニ。殊ニ人ノ聲音言語ノ正シク美タキコト。亦奠ニ萬國ニ優テ。其音清朗ト清クアザヤカニシテ。譬ヘバイトヨク晴タル天ヲ日中ニ仰ギ瞻ルガ如ク。イサヽカモ曇リ無ク。又單直ニシテ迂曲シル事無クシテ。同書ニ「ト國人ノ音ハ。凡テ朦朧ト渾濁リテ。譬ヘバ曇リ日ノ夕暮ノ天ヲ瞻ルガ如シ」と有るに對へられて。眞ニ天地間ノ純粹正雅ノ音ナリ」といそれなり。此ハ古語ニ。言靈能佐吉播布國。まさ事靈之所佐國。この二つは言の心ハ。皇大御國は言語ハ。實に意と含畜せるふるゞ。其用法ハ。天地開れ純粹正雅の音ヨて。言でと小無盡の定格有て。称呼とふていよく事物の本義とらいし。轉り用ふてい進退作用の言とふて。或ハその形狀とかさる言とふて。そもヨ彼我反對の條理ハて。まさ係辭とふてい連れたる意味の淺深とわうち。助辭とふてハ言外ハこゝろ用ひと知らしめ。或ハ禁止の辞とふて。指揮の辞とふて。結辞とふてい上ヨて言ひ下れ叉の意と別ちて。疑。治定。過去。現在。未來ヨ之きためふどゝとも奇〻妙ふるヨしとかさる古語ふて。心とつけてといつる言はこゝろと熟く得られさる思辨ふべくふむ。

説ヨて甚も尊くふむ有ける。然もどもこは言靈は妙用世ヨかくきてふむ有けると。本居大人は如此く見顯いし出給てかく言舉せちきたるふむ。千萬年は前ふも後ふも比類罕ふる功績ヨハ有ける。うの書つさへられさる。古事記。傳。漢字三音考。字音假字用格。詞の玉は緒ふどとく書れ中ヨそれこゝろ用ゼられさる事ども也として。何くもは書はたもも知きる事ふて。つぎてハ鈴木朗ゲ言語四種論いとよし。後鈴屋翁の詞八衢。詞通路ふどゞ目さむるぞりをめでさふ。ふてける。此書せヨいでとよて天下ふやゝく活言の方ヨ心と用ふる輩ふんいと多く出來ヨさめるべともいいどきいさをふてけて。まさかざし抄ふゆひ抄も。此ヨふらべ

て必見るべき書ふて。然るに善事と惡事い繼ぐ世は理ハすべもなきかも。此大人の精説と竊〳〵ふがら。聊は過と見出てい。我たけく得たてげに。此よて彼よて何くまは書どもと著〳〵出て。煩ハ〳〵きまで多らるハ。此互爾袁波はふゝどもて其弊てよて。今ハ事實と徵〳〵明らむる學問ハ傍は物となりて。互爾袁波はすぢよのゝかぢつらひて。生涯は力と用ふる人ぞ多らめる。いろふロを〳〵き事も〳〵ずやてきてよて此捷徑ハつくれるなり。此書おのゞ家説と立ば。言語は條理てつけて見得る事等と輯ゑ。それは今按とも記〳〵添て。初山蹈のもをりゑとて。物〳〵さるふて。

音韻

同書ふいもくサテ其古言は正音ハタゞ四十七ニシテ。ヤノ行ノイエト。ワノ行ノウヲ加フレバ。都テ五十ナリ。此イエウノ三音ノ各ニツアル所以アリ。ニツカト思ヘバ一ツ。一ツカト思ヘバニツニシテ。ツトモニツトモ云ガタシ。此妙處ハアヤワ三行ノ音ノ分レタルユエヲヨクア解セバ。オノヅカラ明ラカナルベシ。是ニカノ行サノ行タノ行ハノ行ノ濁音合セテ二十ヲ加フレバ都テ七十ナレドモ。濁音ハタゞ清音ノ變ニシテ。モトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇國ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立ズ。清音ニ攝スルモノナリ。一音ノ言ニ濁ル例ナク。又ニ音三音ヲ合セタル言ニモ首ヲ濁ル例ナシ。凡テ濁ハタゞ其中下ニノミアリ。然ルニ上ヘ佗ノ言ヲ連ネテ合セイフトキハ首ヲモ濁ル事多。月ヲモ望月ナドト云トキハ。ツヲ濁リ。川ヲモ谷川ナドゝ云トキハカヲ濁ル

ガ如シ。此例ヲ以テ見レバ。一言ノウチノ中下ニ濁アルモノモ。其本ハ二言ノ連合セルモノナラム。其意得ヤスキモノヲ一ツニツ例ニイハバ。祖父母ハ大父大母ノ義。柳ハ箭之木。窓ハ間戸。袖ハ衣手。筆ハ文手。札ハ文板ニテ。皆二言ノ一言ニナレルニテ。濁音ハ何レモ連聲ノ便ナリ。然レバ此餘ノ。義ノ知ガタキ濁音モ皆此類ナルベキカ。○また古史徴ニ。古語ニ濁音の希少なる由ハ。ヨつ今ハ誰も濁音と思ひ定めたる語ニ。もとハ清音なる語多うて。其ハ始繼水などのヽキツハ古書ふも多く濁音の假字と書き。今も大うさは人ハ濁アて云めもど。語の原と思ヘバ。始ハ端。繼ハ付。水ハ滿と通セもバ。原ハ共ニ清音ニて濁るハ中ニ後ろアこの中ニ此ハ此一ツ二ツニ限らバ。長ハ中。正ハ立。氏ハ内なる類ひ。凡て濁音ニいふ萬語の解がさ如ハ清音ニかへて考ふもバ。十ニ六七ハ速ニ解えらること。前ニふと悟アて得て。人ニも彼此語アて驗そしめたる小誰も實然こしなアと云へアて。といそれさるなんげサふさる事ニて。古言と解くものヽ規則とすべき至言なる。

テ其五十ノ音ハ。縱ニ五ツ横ニ十ヅヽ相連リテ。各縱横音韻調ヒテ亂ルヽコトナク。其音清朗ナルガ故ニ。イサヽカモ相

渉リ紛ラハシキ事モナク。○縱とハ。アイウエオ順といひ。横とハ。アカサタナハマヤラワの列といへア。所謂五十連音韻圖こもなアさて此五十連音韻圖ハ。いつれ世ニ誰がつくアしといふ事。古書ニ所見なし。鈴屋翁ハ説ニ此ハ。悉曇字母ニ依アて其學ハ爲ニつくるもけ小して。皇國ハ固有ニ非バ。また皇國ハ語音ハ爲ニつくるもきるもれ小もわらバ。然まども其音ハ五十ながら。原よア皇國の正音ニしてさらニ彼國をうつし取るふわらバ。ろハ古言と以て知べきなア。といそれされど重亂ガ心ハ然らバ。悉曇字母ニ似たるハ我よア彼をうつしたるニ非バ。もとよア皇國ハもれなるがかしこ小も傳アたるニて。おのづから彼よア我ニ似さるなア。これ故ニ印度ハ音韻。此五十連音ニて更行ぬも有ど皇國ハ言語ハさめニハ。此ニて有餘不足なきニても。固有なる事着くなんいアけるなア。如此く天地間の正音なるよアア。太古よア誰が言ふともなく自然ニ傳ハアたるなる。文字ニ以て事ニ記レ世ともなアて。ハ後ニ次第て見きバ。これ五十連音韻圖とハなアるなア。其證ハ一言のうへニ用ひとなれニ依らざきバ。ろれ用とこはからぬニても知べし。とるうニ後世ニ梵文ハわさる時節とまちて。天下ハ言語の更ニ轉活き出ん

もはとしハ。ふつゝ一一ノ音ニ平上去ノ三聲ヲ具シテ。言ニ
思ひよらずゐん。隨テ轉用スルヲ。○重亂云皇國ハ語言ハ。たゞ平上去の三ツのミ
ふ。俳離缺舌ハ音聲言語ヲ見ゐまゝ聞ふまゝ其方ざまのこ
とゞひハ爲れども。此方はことバヨハる事ゐさ。
ハ同書ニ先皇國ノ言語ノ法。連用ノ便ニ隨テ。同言モ三聲平上
去轉變スルコトニテ。其轉變ニ依テ義ノ種〻ニ分ルゝコト
アリ。日ハ平聲。樋ハ上聲。火ハ去聲ナルヲ。日影ト云トキノ日
ハ上聲。掛樋ト云トキノ樋ハ去聲。火箸ト云トキノ火ハ
上聲トナリ。山ハ平聲ナルヲ。山風山松ナドゝ云トキハ去聲
トナリ。東山西山ト云トキハ上聲ニナリ。宇治ハ去聲ナルヲ。
宇治川トイヘバ上聲。宇治橋トイヘバ平聲ニナルヲ如ク。何し
ノ言モ皆其聲轉スルヲ。若本音ノマゝニ呼ブトキハ。其義異
ナリ。カノ山風山松ノ如キ山ヲ本音ノマゝニ平聲ニ呼べバ。
山ト風ト二ツノコトニナリ。山ト松ト二ツノコトニナルヲ。
轉ジテ去聲ニ呼ブニヨリテ。山ノ風山ノ松ノコトニナルガ
コトシ。サテ山ハヤトマトノ二音。川ハカトハトノ二音ニテ。

コレヲ一音ヅゝ分テ各四聲ヲ云トキハ。ヤハ上聲マハ平聲。
カハ上聲ハハ平聲ナリ。然レドモ又ヤマトモカハトモ連リ
タルヲ言ノウヘニ平上去アリテ。山モ川モ平聲ナリ。東南ナド
三音四音連リタルヲ言モ。皆同ジコトナリ。然ルヲソノ連ナリ
タルヲ音ヲ。一〻分テ平上去ヲ定メムトスルトキハ。紛ラハシ
クシテ分明ナラズ。是一言ノ内ノ音ハ。親シク連接タルガユ
ヱナリ。サレバコレヲツラネテ。一言ノ内ノ音ハ。三聲分明ナリ。又五十ニシテ足ザル
ウヘニテ定ムルトキハ。
音モナク餘シルヲ音モナキユヱニ。一ツモ除クコト能ハズ。亦
一ツモ添ルコトアタハズ。凡ソ人ノ正音ハ此ニ全備セリ。つ
れ文ヲ。サレバ此五十ノ外ハ。ミナ鳥獸萬物ノ聲ニ近キモノ
ニシテ。溷雜不正ノ音ナリト知ベシと相對ベていとれさヲ。
といヲ。さて其正音は全備ぜるもは。詞の正しちょ依るふい
く文と約めて出せヲ。世は音韻家たちうの悉曇。まさ韻鏡。鵝
珀設ヨよヲていふ說どもハ甚うけがさかヲぴとヲ此とき
ごとゞいひえさるとおかめもべいぎせヲ。古今萬國をいそび音韻はもとハハヒ

フヘホむ。其證ハ口を開き喉よりも眞すぐに息を出せバ輕
くハ――――と鳴る。息のおのづから口中へは
ま孫くふきひぐく聲むる。又唇を開き寛
げ齒を合せて息を出せバ自然かろくヒ――――と鳴る。息の齒に
ふき口中へひぐくこゑむる。ろきか反して唇を合せ窄め齒を開きて息を
出せバ輕くフ――――と鳴る。息はおのづから唇へふきひぐくこゑむる。又さらに
舌を下腭へむしつけしひて息をいきせばおのづから輕く
へ――――と鳴る。息の内腭より下腭へ觸きひぐくこゑむる。こゝに反して口びる
を窄め口中をふくらめて上腭へむけて息を出せバおのづ
から輕くホ――――と鳴る。息の上腭へふき口中へひぐくこゑむる。是を音にむ
かしてたしろに言へバ。喉音はハヒフヘホむる。又今すこし

たしろふいへバ。半喉半唇はハヒフヘホむる。此音を長く分
ヒーフーヘーホーと呼べバろは韻よりアイウエオを出れ。これ
音に格又或説に倣イを重孫うけてアイウエオと呼べバヤ
レユヒヨとむる。ウを重孫うけてアイウエオと呼べバワ井
ゐエヲとむる。まさエをかさ孫うけてアイウエオと呼べバ
ヤレユヒヨとむる。オを重孫うけてアイウエオと呼べバア
イウエオに帰るなり。○字音假字用格に喉音三行はあいう
えれヨリ分レタル音ニシテソノ本ハ一ツナリ。サテ一ツニシテ三ツニ分レタル所以ハ。あいうえれノ
五ツノ音ヲ重ヌレバ。自然トツヾマリテやゆゑよわゐゑ
をノ音トナルユエニ別ニ此ニ行ハアルナリ。故ニ古言ノ中
ニあいうえれノ音ノ重ナリタル言ハ一ツモアルコトナシ
と見えさるまさ喉音ニノミ此差別アリテ。餘ノかさたなは
まらノ七行ニハ是無キハイカニトイフニ。マヅや行わ行ノ

音ハモト二音ヅヽカサナリタルモノナレバ。實ハイハユル拗音ナリ。然レドモ喉音ハ餘音ニ類セズ。柔輭隱微ナルユヱニ二音ヅヽ重ナレドモ。オノヅカラツヾマリテ直音ノ如クナルユヱニ。此ニ行ノ音トナルナリ。餘ノセ行ハ二音ヲ重ヌルトキハ。サダカニ拗音ニシテ一音ニツヾマルコトナシ。故ニ喉音ノ外ハミナ單行ナル「行ナルナリ」とも見えさヱ合せ考べ。これゝ依ヱて思へべ。ハヒフヘホハアイウエオと引出ス爲ゝ導音ゝて。アイウエオハ諸音とすぶる統韻ゝヱ。ヤレユヒヨワ井ゐエヲハ變化とゝすためゝ重音ゝゞゐヱける。○字音假名用格ゝ「韻學」家ニ喉音ヲ論ゼルコトアレドモ。皆古言ニ昧クシテ。三行ノ最然トシテ相混ズマジキ義ヲ知ラザルユヱニ。皆混雜シテ。や行わ行ハ畢竟無用ノ長物ノ如シ。といそれさる然る事ゝヱ。ついてゝいふ「ヤレユヒヨハ舌頭ゝていふべ〳〵ワ井ゐエヲハ唇と合せていふべ」と詞ゝ正ミちゝ〳〵ゝヱ隨ふべし。さて口と箝ミ內腭より鼻へかけて息と出せバ。おのづゝらク。と鳴る。このクンとワ井ゐエヲゝ重拗ゐけて。クワクウクエヲと呼べバおのづゝらカキクケコとなる。これハ不熟音ゝヱ圓熟〳〵て正音ハカキクケコとなる。クハ下腭とうさん爲ゝ。まづ鼻ゝヱ歸入する音ゝヱ。こゝゝ鼻ゝミちとゐて下腭ゝいさる。唇と齒とと合せて。すこし閉きて息と出せバ。スーーーーと鳴る。これスーーーーとワ井ゐエヲゝ重拗ゐけて。スワ井ウエヲと呼べバおのづゝらサシスセソとなる。こゝハ不熟音ゝヱ。圓熟〳〵て正音のサシスセソとなる。舌頭ゝて上齦と うち急ゝ音と出せバ。テッと鳴る。これテッとヤレユヒヨゝかき拗ゐけて。ヤテレユテヒテヨと呼べバおのづゝらタチツテトとなる。こゝ。此ハ不熟音ゝヱ。圓熟〳〵て正音のタチツテトとなる。古來

タチツテトと舌音といへるハ由ふし。諸音舌と以てあやどらざるハむしさきバ舌音と云へバ。諸音ミむ舌音ふアそのゝ觸るゝところを以て名目とたつべし。口とつぐミ上齦へかろく鼻へかけて息と出せバ。むのづらヌと鳴る。これヌとワ井ヲエヲを重ねて。ヌヌヌ

ろくおほきなる意なもべなり。加行の下ゝ堅牢(ケンラウ)と志るせる
ハ。ろれ行の言かさき意なもバなり。佐行の下ゝ窄小(サクセウ)と志る

五十連音韻圖

	統韻				
	喉音 舌本	下腭 齦音	下齦 齒音	上齦 彈音	帶鼻 上齦
	ア	カ(ガ)	サ(ザ)	タ(ダ)	ナ
	イ	キ(ギ)	シ(ジ)	チ(ヂ)	ニ
	ウ	ク(グ)	ス(ズ)	ツ(ヅ)	ヌ
	エ	ケ(ゲ)	セ(セ)	テ(デ)	ネ
	オ	コ(ゴ)	ソ(ゾ)	ト(ド)	ノ
	廣厚	堅牢	窄小	剛直	和順

導音					
半喉 半唇	帶鼻 唇音	喉音 舌頭	上腭 彈音	微彈 唇音	所呑 半韻
ハ(バ)	マ	ヤ	ラ	ワ	喉
ヒ(ビ)	ミ	レ	リ	井	齒
フ(ブ)	ム	ユ	ル	リ	唇
ヘ(ベ)	メ	ベ	レ	エ	下腭
ホ(ボ)	モ	ヨ	ロ	ヲ	上腭
變更	渾融	進前	形狀	採曲	大言 韻高

せるハ。其行の言せバくちひさき意なもバなり。多行の下ゝ
剛直(カウチヨク)と志るせるハ。其行の言剛(タケ)くつよき意なもバなり。奈行

は下ニ和順と志るせるハ。其行は言柔くやいららかる意か
きべかを。波行の下ニ變更と志るせるハ。其行の言變を更る
意かきバなを。麻行の下ニ渾融と志るせるハ。其行の言物と
すべ圓むる意かれバなを。夜行の下ニ進前と志るせるハ。其
行の言すゝゝゆくこゝろかきバなを。良行は下ニ形狀と志
るせるハ。此行ハ諸は言の下ニうひて。其こゝろ有入居かど
はだとく體用は言の形狀を表し意を達す言在バなを。和行
の下ニ樣曲と志るせるハ。其行の言かよゝろかる意もれバ
なを。これらはおもぶきとよく明らめかバ。自然音韻は靈妙
かむいちどるくゝろかる。

體言

詞ハ衢といふうまし書世ニ出しよを。うは恩賴を蒙ふを。
用言は方ニハふうく心と用ひてどかう云めきどこは體言
はゝハおのづらかる物かして。うは定格ハる事ニ心づけ
るさまかも見えざを。余とゝごろ此事を。ならば口をゝう
おもひつさるかつけて。語彙といふ書を著述して。流布さど
や世心ハもども。うハ天下は言語をことぐく彙むるとざか
もバ。とゝふ竟べくもならばかんハる。此語彙ハ鈴屋翁の王
意と得て古史徵ニ古今の言語を鬱めんとうは下がさへさる
へハをつるニ。いとも止事かき大業はかもれニよを。得物し
前すと云れさるニ依りて。重亂かもひれかして志るしそめ
つるかを。其書の大旨ハ體言用言はかぎを五十連音の次

第ニいげ。其徴を詳ニし〜其義を釋せきバいとも〜容易むら
ぬわざむるニよて。うき出来るもでニハこゝられ年とやへ
ぬらむう〜。いうで力と戮せてこ
はつざと相たすけむれ人もがむ。此ついでニいさゝうれ
定格といそんニ。體言といふもれ種〜小別きて。一ニハ有形
體言。二ニハ無形體言。三ニハ用語體言。四ニハ用略體言。五ニ
ハ二合體言三合四合も此例也。むどすべて五種むて。うハさ〜も要む
きか似さもどもこれ差別と熟く知らでハ。ことゞとえてわ
くることいと難く又條理無けきバ。いさゝケむどろうすむ
て。○有形體言とハあめ天。つち地。ひ日。つき月。やま山。かハ川。くさ草。き木。む
だとくかさちうる稱呼むて。○無形體言とハとしつき年。ひと時
春。夏。秋。冬
さてるもつうさふもむど。形むさものゝ名目むて。○用語體

言とハ。うさひ。波行四段用言。やどて。宿良行四段用言。たぎち。瀧多行四段用言。くもて。雲良行四段用言。むどれだとく。用言ハ第二段むる。續用言といひすゑて
うれと物の名とハむしたるむて。○用略體言とハ。うさ歌波行四段用言。やど宿良行四瀧多行四段用言。たぎ瀧多行四段用言。くも雲良行四段用言。むどれ如く。用言ハ第
二段むる。續用言ハそぶうて一ッれ言とむきるむて。○二合
體言とハ。體言と二つ合せたるまて。譬へバ天と地とと二つ
合せてうめつちといひ。日と月とと二ッ合せてひつきとい
ひ。山と川とと二つ合せてやまがとといひ。草と木と二つ合
せてくさきといふが如し。まゝ同例ニて。つて釣船ふ糸ひがゝ。え于浮得物為業
もれ。〜ニざ。むどれごとく用語體言と上ニおきて。佗の體言

と下よつら孫合せたるなり。こまらつる船ひる瀉うる物す
つぐけて用とふれとい別よて一度續用言を言ひすゑて。體
言とふしさると。佗の體言れ上よ置るよて。類ひ多らるもれ
の中よて。ざてわうちてことふ其物とさしていふと又それ
きよ。體言と二つ合せさるよて。上ふると同例ふて。
ふ反して。やまず。山住。まとゐ。圓居。かさこひ。片戀。ふゆが。冬粘。ふどれ類ひ。佗
れ體言れ下よ。用語體言をつら孫合せたるなり。これも上の
用をふすとい異よて。うれ體をこれとくそのごとく
かさる詞ふもば等しきふて。まさうさうら。歌占。ゑくぼ。笑窪。ふどれ
如く。用略體言れ二つ合ひて言とふきるなり。いづきも下ふ
る言とむ孫とする時のことよて。中間。なからのもゝを置てつゞ
けたると同ゝ。餘い准ら〳〵知るべし。三合四合もふ此例ふ。さてかく
連孫合せさる言を合語ともい〳〵て。こまふ六の格ふむいる。

ろれ一よハ第四音と第一音よ轉ゝて。加行さけ酒槽をさうぶ酒槽孫。
佐風かぜ早風をかざ早やゝ。多行手枕をたまくら。手枕奈行稲いね田をいなだ。
波苗行ち〳〵代苗をちハしろ。麻目行め輪目をまぶち。夜行ひえ風冷をひやぜ冷風。
良枯行かも荻枯をからを。和行聲こゑ大をこわだ。大聲ちゐど。加佐多奈波
麻夜良和れ九行ともよいて此例いと多ろて。但阿行のミハ此例ふし
さるハ阿行の音ハいづきれ言れ下よもつうぬ音ふきバる
て五十連音れ中よ。阿行れ音の下よ附ろざると。良行の音れ
上よ居らざると。いづ其二よハ第二音と第三音ふうつして。
こもうれでうなり。
加月行つき夜月をつくよ。瓊夜に矛瓊をぬほこ。麻行かみ風神をかむかぜ風神ふど
いふたぐひなり。此例ふかいるべし。其三よハ第二音と第四音ふうつ
して。多カ行たち帯カをたてハさふどいへるなり。帯カ此例ふかいるべし。其四よ

は第二音と第五音ふうつゝて。加行さは間とこれま。木間奈行に前と荷前のされ。波火行ひ串とかぐし。夜火串行おい繋とおよかけもどい〳〵るう老老繋る。此例おかるべし。其六まは第五音と第一音ふうつゝて。良行ろ白山と白らやま山ふどい〳〵るう。此例ふかるべし。かくれ如く定まる格うて。ろれ連をつぐく所れさまふ依て。然うつろハでいえうらぬわざおるハ。如何イカニといふま通略延約辨ま。「かくれだとく音と轉じて合するハ。下れ詞の意おもく。上れ詞の意かろき時れ事おて」といそれたるまてよく通キコえたるずべて れ言語コトかくれだとく規則をたてゝ足まバ。其條理スジきいやうまえわうるゝもれおて。

用言

用言とハ上ふる體言ふ對カへていふ名ふて。轉ウツてさらくふよて活言ともいふふて。本居春庭翁の説ま。「詞の用ハいうふとも言ひ知らぬ。ともゝ〳〵敬タヘしく妙ふるものふして。一つ詞コトバもその用法ツカヒザマふよて事かいて。そたらさふ隨シタガひつゝ意コロも異コトまし聞キコえふどゝして千チヾれ事コトを言イひ分ワカち萬ヨロズのさまを語カタて別ワカつまい。さゝうも紛ニギるゝ事コトふく。又見る物きく物。人の心まおゝこめさる思オモひの隈クマ〳〵。すべて世中まいてとし有ることいく千チヨロズ萬の事ふて。言盡イヒツくしまれびやらむ。足タラハぬ事ふくいうぬ事ふさい。此えさらさふ依るとさふふむ有てける。

さるい神代よりて。自然定格ありて。今世ふいさるまで轉て變る事ふく。少も違い誤るとさい。その事さらば。其意通え難き物ふ一有バ。一字と雖も猥りふそぶら猥りさ加へふど。すべて大凡ふすべきものふい非ばといそさて。かきその詞八衢と本ふ一てふは佗人くれ考得さる事どもともことばとくふ取纂めこきと校合せこきと訂正して此圖ハ製作きて。さてその用言一云活言れ大綱すべて六種ありていそゆる四段活言。一段活言。中二段活言下二段活言。變格活言。形狀活言。ふど名目せる此ふて。詞八衢ふ「こきられ名もとよりいるふ非ざきとも。事と別ち言ハむふ。名目ふくていい便用らしけき」

バ今かてふつけさるなり。下すべて此名もていへて。といるふよりてもろくれ名目ハその書ふとてふはむのごとくろと定免れるも多うて。其條くふ言ふと見て知るべし。

○詞八衢ふ云く。「四段活とハかきくけさしすせとやうふ。第一音よて四音までつぎく四段ふ。いかんあきいくわけれさんおこもすもせもど活くといふふて。此活言かぎてふくいと多し」。

○同書ふ云く。「一段活とハきるきれふにるふきもど。第二音一段のみふて活くといふきるきれにるにきのるきハ言とうくく活用とふせるふて。其行の音ふハかくハらざるふ

ア。さて此活すべて一音ヨてきにふどいふよヲ外ふけきバ。此活言いとすくふ」。取意

○同書ホ云「中二段活とハさくくるくき。ちつはるつきと第二音三音ヨて。れきおくれくるおくきもちれつおつるれつきふど活くといふふヲ。くるくきつるつきふどれるきハ。一段活のところヨいへるガ如し。此活言モ多からず」取意

○同書ヨ云く。下二段活とハ。えううるうきけくくるくきと。第三音と四音との二段ヨて。えううるうきけくくるくれふどそさらくといへヲ。うるうれくるくれのるきハ一段活の下ヨ云るガ如し。此活言のそそいと多し」。取意

○變格活言とハ上ふる四種活言とハ。大同小異ヨていづきハ活言ふも屬ぬ一種ハるとヲ。かヲホ變格とハ名づけさるふヲ。加行ヨこきくくるくれ。中二段活言ホ大同小異ふヲ。佐行ふせしすするすれ。下二段活言ホ大同小異ふヲ。奈行ヨふにぬぬるぬれ。四段活言と下二段活言とハ大同小異ふヲ。良行ふちりるきの四段活言と大同小異ふヲ。斷落言とりといふのミ。有居の二言ホ變ふヲ。

○形狀活言とハ。上ふる五種活言いことくく。進退作用の言ふるふ對てくしきけれけくきとと。凡て物の形狀とハいへる言ふるふよヲ名づけさヲ。さてそのくしきけきの行とヲ。かヲヨ久活言といひ。しくしきけくしくしくしきけくけくけく

さえけきの行とかゝ小志久活言といひ。けくけしけさけく
きの行とかゝ小祁久活言といへゝ。然きども本義といへば。
形狀とさす言ふるを以て形狀活言と号けて。此一統の活言
の名目とせるなゝ。
○上の六種活言のくさゝ〳〵と。五段に分ちて。第一段と將
然言といひ。第二段と續用言といひ。第三段と絶定言といひ。
第四段と續體言といひ。第五段と既然言といへゝ。
○將然言といふこの段の言。將に然らんとする意にて既然言
にあひむかひたる言ふなゝ。いさゝうその差別といさゞ。たゝと
へば同じゞと受る辞にても。將然言と既然言よりそのうく

る意かたゝて。こゝよりゆけばとうくきば。ふゝゆき
とまへよりゆけばふゝふると。既然言よりゆけばおせゞと
うくきば。後よりまへはゆきといふ事にふゝて。大に
ちがへる事。唱へあゝろゝてさとるべきふゝ。漢字三音考に
「第一音ハ未然ラザル二用」とゆきどゝらば。
○續用言といふ。漢字三音考に「第二音ハ方ニ然ルヲ下ヘイヒ
オクル二用」とゆるかよりてふづけさゝゆる人ハ連用言と
いへゝ續と字義まさく同じく用ひ來れきど。其つゞけざ
まこゝにはい連よりゆ續のかさゝふへるやうにおぼゆきば。今
はおのゞこゝろと思定めて。續用言とふづけれるなゝ。さて

續用言といふ。此段の言を唱へ試みるに。何やらいひさしたる如きこゝちもするかよをて。下に用言とそふまゝ。その事遠るふをいさゝか事はついでに。續用言。絶定言。續體言のけぢめといもぐれたとへば同じ下二段活の。ふがるといふ言も。拾遺に「音ふしの川とぐつひにふがれいづる。言はでものもふ人のふもぐ」。こゝはこゝに續用言に用ひさるをて。まさに古今に「立田川もみち葉ふがる。神ふびの御室に山ふしぐもふるらし」。とゐるハ絶定言に用ひてきることばをて。まさに後撰に「もみぢ葉のふがるゝ秋ハ川でとに。錦洗ふと人やみるらん」とゐるハ。續體言ふ用ひさるをて。秋といふ體言へ續けたるぐごとくいく千萬の言語にても。此格ふもるゝ事ふし。まさに此言をいひすられば體言となるをて。上ふる體言の條に用語體言まさに用略體言ふどいへるハ則これをて。

○絶定言とい。漢字三音考に。第三音ハ方ニ然ルヲイヒサダムルニ用。とあを門人某ぐ說に絶ハ截斷の義ふを。定ハ字書に安也決也又止也とゝえ。周礼に美定の字ゐを。註に定猶熟也熟卽止故以定言之とゐるふど。彼此考合せて然名づけたるに隨へを。さて此段と何ゐふに絶定言といふぞとをもぐたとへバのどけき春あつき夏すゞしき秋さむき冬といつどけども。のどけし春あつし夏すゞし秋さむし冬とい續

うず。詞もさいくさびれのづからきる〜ふよアてもアな
は續體言の下ま見合せてさとるべし。
○續體言とハ。いひぶがしま下へつゞきて。おとゞめ趣意そ
こまて落著せぬもアたとへバ春ハのどけし夏ハあつし秋
ハすゞし冬ハさむしといへバ。絶定言ともアて。詞も趣意も
落著するそ。春ハみどけき夏ハいなつき秋ハすゞしき冬ハさ
むきといへバ。詞も趣意も落著せバ。打きゝたるまゝふてい
落著せしやうもきど。どさやらふ心ずをれせぬやうまおば
ゆるもア。そハ何ものもまさやうもるふらと。尋もとむきバ。ま
ハ絶定言きい續體言ふもゞまア。又いろまして續體言ふる

ぞとおもひて。ロまいひつゞけ見きバ。春ハのどけきもの夏
ハあつきもの秋ハすゞしきもの冬ハさむきものとやうま。
物といふ體言へ。ものづゝらつゞきて。詞も趣意もこゝまて
落著もるもア。こきまよアて續體言とふづけて。或人の連體
言といへるハとらず。
○既然言とい。既ハ然るといふ言まて。上ふる將然言ま對へ
さる名もア。いさゝ其差別と言ハんま。後撰ま「いさら夜の
月と花とと同ゞくバ心しきらん人ハ見せぜや」古今ま天の
川もゝぢと橋ま渡せぜやたふぞさつめ秋をしも待つ」と
ある此二歌ともま。せよアぞやと受されど。前ふるハ下二段

活言佐行の將然言よりでと受けてそきふ願のやと添さるふり。俗ヨ「ミセタイモノ ヂヤ」と云ふ意ふり。後ふるい四段活言佐行の既然言よりでと受けて。ろきヨ疑のやと添たるふり。俗ヨ「ワタスユエカシテ」といふ意ふり。如此く大ヨ差別いることもり。よく〳〵辨ふべし。

○諸の用言どもと。其まゝヨてい未語ヲ成ざるも多ろり。譬バ四段活言ヨて。あろれさちどいひていい何の事とも辨へ難きと運用活言（一云受辭）とそへてろろずあろでいろどあろんいろましいろバ。又わさずわさどれさんあさゝしわさバとやうふ言へバ語ヲ成て聞ゆるが如し。又其受るところよりうつり活用く事ヨていろずいろぬあろ孫と轉用きいろんいろぬと轉用きもどする事。用言の例ヨたがふ事ふきふり。詞八衢ふも記さきさる如く受る辭もて。六種の活言を分定むるが甚正くて。恥も違ふ事ふけきバ。よしふる將然言の下ヨいて。すでどんましでと志るし。續用言の下ヨいてつゝぬるたりけりきと志るし。絶定言れ下ヨいめりらんべしらしとうしと志るし。續體言の下ヨいかふまでにとよりがと志るし。既然言れ下ヨいでどと記せること。本書の例ヨ倣へり。何度も讀ミそらんじおがえて。わが物ヨふしえて。物したらむヨい古の言ととくヨ得やすく。今事ヨ記すふとこのやまちふろらむ物ぞ。

五轉名目	四段用言						一段用言					中二段用言				
	加行	佐行	多行	波行	麻行	良行	加行	奈行	波行	麻行	夜行	加行	多行	波行	麻行	夜行
	飽	押	打	逢	任	鈎	著	似	干	見	射	居	起	落	戀	恨
將然言	かさたはまらし						きにひみいぬ					ちきひみいぬ				
	んじでず						ぜずんじでず					んじでず				
續用言	しきちひみいり						きにひみいぬ					きちひみいぬ				
	てつなぬなけき						てつなぬなけき					てつなぬなけき				
絶定言	くすつふむるゆ						くすつふぬいみひにる					ゆむふつく				
	めらべとらべと						めらべとらべと					とらべとらべと				
續體言	くすつふむるゆ						くすつふぬいみひにる					ゆむふつくる				
	にまでをがらを						にまでをがらを					にまでをがらを				
既然言	けせてへめれ						けせてへめれ					くつふむゆれ				
	ぜど						ぜど					ぜど				

言	下二段用言											變格用言			形狀言		
良行下	加行	佐行	多行	波行	麻行	夜行	良行	加行	奈行	佐行	加行	久活善	志久活惡	祁久活遠
和行率	阿行得	加行受	佐行失	多行捨	奈行兼	波行添	麻行求	夜行消	良行枯	和行植	來	爲	太	有	善	惡	遠
ぬり	えけ	せて	へね	めえ	れ						こせ	らか			く	しく	
ぜず											ぜずんじでず				ぜ		
ぬり	えけ	せて	へね	めえ	れ						きし	りに			く	しく	て
きけ											てつなぬなけき						
うる	くう	すつ	ぬふ	むゆ							すくぬる	りぬ			く	し	
ひと											と	ひと			ひと		
うる	くう	すつ	ぬふ	むゆ							くぬする	るぬ			き	しき	
ようが											ようがをにまでふ	ようがをにまでふ			ようがをにまでふ		
れる	くれ	すれ	つれ	ぬれ	ふれ	むれ	ゆれ				くれ	れぬ			き	しけ	
ぜど											ぜど	ぜど			ぜど		

○右の四段活言ハ。加佐多波麻良の六行ヨリ有テ。阿奈夜和の四行ヨリハ少シ。絶定言續體言一つ詞ヲるかよヲ詞ハ衢ヨリハこれと一つ少シ〻。受辞のミと二段ヨリ分たまども。此圖ヨリハ悉く二段ヨリ記シ分ヲヲ。下ミもこの例ヲヲ。ヨリ既然言ヨリヲ有と受け活用く辞ヲヲ。變格活良行の下ヨリハふべし。詞ハ衢ヨリ云く。四段活言ハ第一音。かさたまらよヲ。んの辞と受るふ。俗言ヨリハ〻ることとヲヲ。そハ其第一音とんの辞とと合せて。第五音こそとかもろといハヲ。めらんとゆこかざゝんを

かざそ。まさんとまといたんとといかもどいふもヲ」

○一段活言ハ。加奈波麻夜和の六行ヨリヲヲ。阿佐多良の四行ヨリハ行ヨリハ少シ。さて將然言と續用言と一つことバもヲ。又絶定言と續體言と一つ詞ヲる事圖の如シ。詞ハ衢ヨリ。るもじとそハてきるゝ詞こゝの絶定言ヲヲ。とつぐく詞こゝの續體言ヲヲ。とと兼さるハ後の定ヨヲヲて。古くハきれひみいねよヲさるゝ詞と受る辞と用ヒヲ。取意とヲヲ。そハ見らん見べき煮らしも似べきヲど多くハヘヲ。さてこゝハ射鑄の活きと詞ハ衢ヨリハ。阿行とせらもさもど。諸書既ヨ夜行ヨリ加ヘされバ。そもヨ隨ヘヲ。

○中二段活言ハ。加多波麻夜良和の七行ヨリ有テ。阿佐奈の三行ヨリハ少シ。さて將然言と續用言と一つことバもヲ。詞ハ衢ヨリ云く。中二段活の第三音ヨリ。るもじとそハてきるくるつるふ

るむるゆるるこうると。俗言ハ第二音ようつゝてさるち
るひるこるいるとるぬるといへと。おくるとれきるとづる
ととぢるふどいへるゞ如し。取意
○下二段活言ハ。十行ともかことゞく有リ將然言と續用言
と同じ言ふと。詞ハ衢ニ云く「下二段」活の第三音ふ。るもゞと
添ていふ。うるくるするつるぬるふるむるゆるぐゝうると
俗言ハ第四音の方ニてえるけるせるてるねるへるめるえ
るれるゑるとうつゝいへとうくるとうける。やするとやせ
るといふゞ如し。取意
○變格活加行ハ。詞ハ衢ニ云く。くるといふ詞のミにて此外

ふゝ。受る辞ふど圖の如し。但。去ハ去ハ辞と受るハ。さゝきゝ
ろと受る格ふるとゝうれハいと稀ふて。こゝふゝろふどこよ
と受こる多し。さてすべてハ活ニ。第五音ニ活くことふきの
ミにて外ニ例ふし。
○同活佐行ハ詞ハ衢ニ「活きざニ受る辞ふど圖の如し。但。去
去ろふどハ辞と受るハ。去よと受る格ふると。さハいそゞせ
ゝせゝろふど。ぜよとハミ受るも外とハ異ふと。すべて圖ニ
出せる辞ハ。五つニ別きて相混雑(アヒマジハ)る事さらニ無きと。右の如
く去去ろハ辞のミ佗ニうつきと。加行の變格ニもこの辞と。
こゝハ如く用たるふどよく似さと。こゝふるハ第四音ニ活

きたるとゝ。加行ふるハ第五音ゝ活きたるゝゝ異ゝて。其外ハ
全く同じ」といたれさるゞ如し。ゝゝ何くも社體言用言ゝてもその言
といひすゝて體言とふゝさる。よゝ。此詞ゝ活らせて。何すると多くいへゝ。
又中むゝしゝ言ゝハ。えんずるゝんずるゝんずるゝどもいへゝ。但體
言よゝを受るハ清ゝ。用言ゝんよゝを受るハ濁ゝていふ例ゝゝ。
○同活奈行ハ。詞八衢ゝ云く。往死の詞二ツのゝゝ。活きゞ
ゝハ。大低四段ゝ活の如くゝて。切るゝとつゞくとの詞二ツ
ゝ分ゝ。ゝのむすび二つゝゝ。
○同活良行ハ。有居の二つのゝゝ。詞八衢ゝいたれさるゞ
如く。四段活ゝくすつふむるハ。絶定言と續體言とを兼たゝ

ばゝるとあるとも。をるとをるともといふべき格ゝるとゝ
ゝとゝゝとも。をゝとをゝともといひ。絶定言とゝゝをゝと
いふ例ゝゝ。それゝゝめゝらんべゝらゝの辞ハ。續體言ゝる
るよゝを受る事。大ゝゝ四段活ゝ同じ。○ゝゝ四段活の既然言。
けせてへめれよゝ。此活ゝ受てあけらんゝけゝあけるゝけ
きおせらんれせゝおせるおせれと既ゝ然有さまといふ言
ゝゝ。此故ゝ萬葉ゝハ飽有押有とやうゝ。有の字を添らきゝ
ゝそれ義ゝゝ○ゝゝ形狀言活ゝゝ此活ゝうけてよゝ
あゝの ゝゝくゝゝ るけくあゝ
引合 のひきあい るけゝ のひきあい
ふ言ゝゝ。ゝきらハ云云有といふ言ゝるゝ。その意急ゝるゝ

よゐ。如此く其ことバのせまるゐゑ○まさ運用活字圖の。
ざゐ げあゐ たゐ てあゐ とあゐ けゐ きてあり めゐ えあゐ
の引合 の引合 の引合 の引合 の引合
ゐ ゐあゐ せゐ ゐてあゐ ゐどゐ ゐ此ゐさらさま属け
合 の引合 の引合
るものゐ。この故ゐ。有のこゝろと含める事。運用活字圖。ま
さ結辞の下ゐもいへゐ。併せ考ふべし。

○形狀言ハ圖のごとく久活志久活祁久活ともゐ受る辞の
例。上ゐる五種活とハ異ゐ。さて此活の轉聲をゐぶきて。よ
ごとゐ ゐ ざまゐど下へつゞくるゐゐ。まさを 月清を 山 祁 げ
げを ゐ ゐどゐどうくるゐゐ。いひすゑて體言とせるハ。絶定言ゐ
るべくおもいるゐゐ。

自佗活言

上ゐる四種活言の進退作用ゐるゐつけて。そもゐろハゐて。
自然すると佗よゐ然せらるゝとの分別ゐゐ。詞通路ゐ。歌よ
むゐも。文かくゐも事を記ゐゐも。萬事と分ち。其狀を委しく
知らするゐもバ。專この自佗の詞の活用を。最と心得べきを
ざゐ。其ハおのづからは定格ゐて。此方の事と云ふゐ。
此方ゐ用ふべき言を用ひ彼方は事とかさるゐハ。彼方ゐ用
ふべき語を用ひざもバ。其事委しく分きゝ。自佗混雜して言
語成ハぞ。其さま聞え難けもバ。等閑ゐ思ひ過さゝ。よく辨へ
置べき事ゐを抑此活用ハ千萬の事を。委しく言ひ分つわざ

ふきバ。其活用さまも種〻多うると。世の人自佗のことゞハたゞ。烟もどのたつといふハものづゝらたつ事ゝいひたつるといふい人ハたつる事ゝいひ。重亂いそくゝうやうの自佗ハ合離の義ゝつきてゝ佗ハることゝて四段活と下二段活とのゝへゝのゝ有て。佗の活言ゝあづゝらぬ事ゝふきバ別ふて。下ゝくゝ〻〻く辨へむけて。花のちるといふハおのづゝらちる事。ちらバといふハ風もどのちらバ此ハ四段活言ゝまゝ四段活佐行の添ゝる例ふて事とのゝ思ひて。委〻く考へ知るべき事とも思ひらず。又この事と論へる書も無けきバ。おのづゝら心と附る輩も無くもの歌よゝものよく心得ゝて思ふ人も。取もづ〻てい誤る事ふきゝ非バ。況て初學ハ輩ハ甚たゞ〻〻くて。常ニ誤る事多けきバ。其

定格と教へ諭バ。とゝて。自佗の詞と六段ゝ次第て。一目ゝ見度〻心得易ゝらしめん爲ゝ。圖ゝ出〻て懇到ゝさとされゝて。それゝたまゝふゝかゝよて。重亂此書と著述ゝつけて。今ゝゝ捷徑と見得つるゝよて。一目ゝ見度〻心得易ゝらしめん爲ゝ。圖ゝバらハ〻て其定格と教へさとすものふて。さてゝハ自佗とゝゝつ辭ハ。佐行良行相雙對て受る事ゝて。各上ふる用言のかさふきるものゝて。別ゝ一種の活言ふあらバ。この故ゝその受るところゝよて。五轉する事すこ〻も用言ハ例ゝたゞそバ。但合離ハことバの自佗ハ此例ゝバらざきバ。下ゝ一圖とバらハ〻て別ゝ物せて。

活言	下二段自他活言									變格自他活言		
下率	得	受	失	捨	兼	添	求	消	枯	植	來	爲	往	有
わり	え	け	せ	て	ね	へ	め	知	れ	忘	こ	せ	ら	ふ
					ら	さ					ら き	ら き	れ	せ
					ら き	さ せ					さ き	さ き	れ	せ
					ら	さ					ら	ら	れ	せ
					ら き	さ せ					さ き	さ き	れ	せ
					さ	す					さ ら	す さ ら	す す る	
					ら	る					る	る	

右は四段活佐行ようつて。さしすせと活用辞ハ。こづらも物と然するふて。故爲の字れ義ふて。又人はうへとうやまふ辞ともふるなり。○下二段活佐行ふうつてせすもるすきまるるしるきの對ふて。四段活させさすさするさすれらるまさ變格活。奈行良行よて受く。させさすさすれらるらるしらるきの對ふて。一段活中二段活下二段活まさ變格活加行佐行よて受く。と活用く辞ハ。佗と して然せさする辞ふて。故ふ令れ字の義ふて。まさ尊き人のまろしれまふと敬ひていふ辞ともふるなて。○下二段活良行ふうつて。せすするそきの對ふて。四段活まさ變格活奈行良行よて受く。るるしるきらるらるしらるきさせさすさするさすきの對ふて。一段活中二段活又變格活加行佐行よてふうと活用く辞ハ。佗よて然せらるしの辞ふて。故ふ被の字

は義ふて。

○四段活の將然言よて。同活佐行ふうつして。はらさんあらしはらすあらせといへバ。こづらも物と然するふて。下二段活佐行ふうつして。あらせはらすはらするあらすれといへバ。佗と して然せさする辞とふて。まさ下二段活良行ようつして。あらきはらるはらるきといへバ。佗よて然せらるしはらるきはらるしはらるきはらるきといへバ。佗よて然せきて下二段活と。たゞひふ入交て自佗の分るしことバふんはらる。野之口翁の説ふ。離てはらる物と合する詞ハ。四段活天然とふて。則佗よて然下二段活人爲とふるなり。則自然するふて。

そもゝ反して。合ひて有る物と離れ詞ハ。四段活人爲とふて。下二段活天然とふるなりといれさて。こもふよて一目ふ見度し。心得やすからしめんが爲ゝ。さらゝ圖ふもすする事左のごとし。

離		合	
佗	自	自	佗
裂		附	
け	か	け	か
け	き	け	き
く	く	く	く
くる	く	くる	く
くも	け	くれ	け

かくれごとく相反して用とふれ事少しもたがふことふし。余ハ此例ゝふぞ〳〵へ知るべし。

○一段活。中二段活。下二段活ふど。圖のごとく將然言ゝて下二段活佐行ゝうつして。きさせきさすきさするきさすれとやらうい〳〵ば。佗ヒトとして然せさする辞ふて。まゝ下二段活良行ゝうつして。きらるきらるきらるきらるれとやらうい〳〵ば。佗ヒトゝて然せらるゝ辞とふるなり。

○變格活加行ハ。將然言ふることゝて。下二段活佐行ゝうつせば佗として然せさするふて。下二段活良行ゝうつせば。人ゝて然せらるゝ辞とふること。上の例ゝ同じ。

○同活佐行ハ。將然言ふるせゝて。四段活佐行ゝうつしてせさんせしせすせゝといへば。ゝづから物としらするふて。

まゝ下二段活佐行ようつせば。佗(ヒト)として然せさする辞なり。
まゝ下二段活良行ようつせば。佗よりしらせらるゝ辞とも
るなり。さてもろ〳〵は體言より。せさすせらるとうくる事
多きものなり。こゝ體言とせよりうけて。ろをよさすらるの
辞のそひて。活用(ハタラ)けるまて悉く此屬なりと知るべし。
○同活奈行良行より四段活佐行ようつせばゝづらら物を
しろする辞なり。まゝ下二段活佐行ふうつして。いふす(いらす)といふ
へば佗(ヒト)として然せさするなり。下二段活良行ようつして
いふる(あらる)といへば。佗(ヒト)より然せらるゝ辞となるなり。思ひまぎ
ふることなられ

運用活字

諸(モロ)の用言(ハタラキヨハ)より受(ウク)る辞(テヲハ)と。運用活字と号(ナヅ)けとり。然(サ)るゝ上なる
用言のまゝにていゝ言(イヒ)さしふりて。未語(ダ)と成(ナ)さゞるも有る
と。こゝ小舉(アゲ)たる辞(テヲハ)どもは移(ウツ)しまくれば。悉(コトゴ)く其用とゝくの
ふるものなるべなり。詞八衢より。受る辞と圖なるどもは出(ダ)して。
煩(ワヅラ)はしきまで言(イ)へると。無益の事と思ふ人もいるべけれど。
受る辞は圖の如く横に通りて。少も違(タガ)ふことなく。いと正しく。
まゝ四種の用言と別(ワカ)ち知らんは。この受る辞もて定むるぞ
肝要なるべよく辨(ワキマ)へ知らしめんが爲なり。といるまよりて。
用言のところは將然言はいはずでんまして。續用言はいて

つゝぬるたゞけゞも。絶定言まゝい。めゞらんべゝらゝとかゝ。
續體言まゝい。かゝまでにとよゞが既然言まゝい。ぞゞと其下まゝ
受る辞の大抵の定格と擧たまゞ其ゝ五轉の位と定むる目
標ぞうゞまものせるまて。委くする時ゝ。おほゝまゝ有て
その受る辞まゝ五轉して。上ゝる用言まゝ屬るゝうゞゝ活
用うぬ有ゞ。こゞゝふよゞ一段づゝ圖ふものして其用法と知
らゝむ。さて竪まゝ五段まゝうちちゝるゝたるゝ受て用く辞ど
もゝゞ。頭まゝ不或ゝ將とうけるゝ。假まゝうつべゝ正字と考へ
ゝるせるゝゞ。圈中ゝるゝ無活用辞どもゝゞ。用言まゝ結辞
ゝ係まゝゝゝゝゝ見て。よくゝ思ひ辨ふべくゝむ。

將然言運用活字圖

飽	著	起	得			
不	將	將爲	令	不有	無活用辞	
ず	○	ませ	しめ	ざら	ふん	ふく
ず	ん	まく	しめ	ざゞ	で	ちくま
ず	ん	まー	しむ	ざゞ	じ	
ぬ	ん	まー	しむる	ざる	だ	
ね	め	ましう	しむも	ざれ	だや	

右の不行ふる。ずぬ祢ハ。爲もじゝ反對ゝゞ○將行のんめハ。
ゝゝゝゝゝ

ふと。詞玉緒ふ「おかよそまし」ん。「と延たる如く聞えて。大ろ
こんといふと同意ふとと。○令行の志めし「むもむるし」
「むまい。下二段活麻行の屬ふと。○不有行の。ざらざとざるさ
「きはずはとのひきはひふと。○ふん。はやひ抄ふ「そとはつ
らふることばふと」とはと。そはそも「徒の係辞のまてむす
ぶ例ふる事。詞玉緒ふ委し。○でい不の轉用ふと詞玉緒ふず「
「しての約まるな」とはと。○ぢも同ぢく不の轉用ふと詞
玉緒ふ。ずのいまだ然らぬとろ孫ていふ辞ふ」とはと。○ば
いものくふとゆきと孫ぢふ意ふと。用言の下ふくいしくい
へと。○「ぞやい上ふるばふ。願のやれろいまるふと。○ふくふ

「くふい。形狀言久活ふて。無もぢみ意ふと。

續用言運用活											
起			著		飽						
將既	將往	將竟	往既	竟既	既	來有	所有	去	竟		
○	○	○	ふけ	てけ	け	けら	たら	ふ	て		
ん	ふん	てん	○	○	○	けと	たと	に	て		
けん	ちん	てん	ふき	てき	き	けと	たと	ぬ	つ		
けん	ちん	てん	にし	てし	し	けれ	たる	ぬる	つる		
けめ	ちめ	てめ	にしろ	てしろ	しろ	けれ	たも	ぬも	つも		

ことばのちうち 運用活字

字圖			
得エ			
無活用辞	つ	祢	けア	ふバ	ふゞ
	ゞて	ゞて	こせ	だま	のゝ
	げ	あふ	しゞ	ま	ん
	も	ゞ	や	か	こう

右の竟行のてつつるつきい。下二段活多行の屬ふア。○去行のふにぬぬるぬきい。變格活奈行の屬まて。所謂異ぬのぬまて。將然言よアうくる。不行のぬといい異ふア。○而有行のたらたアたるたきいてありの引合まて。變格活良行の屬也○來有行のけらけアけるけきいさてけアの引合まて。變格活良行屬ふア。○既行のけきし志ちい。所謂過去のしふア。さてこの目標ま。既もじと借用ひさるハ。或人の說ふよきアくハしくい結辞の下まいふべし。○竟既行のてけてきてしてしちハ。下二段活多行の續用言よア。過去のしふつゞけさるゞ。一つは用言は如くふきるなり。○往既行のけけかきけしふしちハ。變格活奈行の續用言よア。過去のしふつゞきたるゞ。一つは用言の如くふきるふア。○將竟行のでんてめい。下二段活多行の將然言よア。んめとうけ活用ける辞ふア。○將往行のぬんぬめい變格活奈行の將然言よア。んめとうけえさらける辞ふア。○將既行のけんけめい上ふる。既行の將然言よア。んめと受け活用ける辞ふア。○つゝけ語の間まいるい。

てゝ通ひ句れ終よいるゝ。いひさゝして言外の意とゝもゝしむ
る辞ゝ。○係ゝ。變格活奈行の屬よて。今する辞ゝ。○けら
しゝ。絶定言よてうくる。らしゝとゝ別よて變格活良行の將然
言よて。しゝとつゞける辞ゝるゝ來有行のけらよてかさゝを
るゝて。○ゝむゝ變格活奈行の將然言と。ゞよて受てゝて也
さゝもうて係ゝふ辞ゝて。○ゝゝらいゝゆひ抄よ。本よての
隨よしゝおさて。取直し撰びすてゝゝどもせぬ辞ゝてとゝて。○
がてい難よて形狀言久活れたぐひゝて。○がてらい。物ゝて
てその傍ゝ事とかぬる辞ゝて。○こせい。乞爲ゝて萬葉よ夢
よ見えこゝろ。ちてこすゝゆめ。ゝてこせぬゝもゝどゝるこれ

ゝて。ともゝ乞願ふ意とゝゝるゝう。○だよゝ。ゝゝもひ抄よ。其一
つといひゝきらめて。殘てと思こせたる辞ゝてとゝて。○の
こゝ。ゝれ物事と一條よたてこいふ辞ゝて。○げゝゝもひ抄
よ。表はさまと見て心と量ていふ辞ゝてとゝて。○ゝふゝ歌
よゝ。何ゝへずとよめて。ゝもひ抄よ。つひよゝいさゝらんとす
る物の。いまざえしゝてぬうちゝといふ意ゝてといへて。○
しぶゝ。てしぶてしぶゝるどゝるしぶ願ひとゝる辞ゝて。○
にゝ。係辞ゝて。徒よ屬に。變格活奈行の續用言よて。ゝよぬぬるぬ
きとゝさらきて。續體言よて受るにとゝ別ゝて。この故よて
と相雙びて活用とゝすこと。てんゝん相ゝらびてきにき相

雙ぶぐごとし。○ともぐやう屬にころみ六つい係辞ふて。

絶定言運用活字圖

飽著起得

也	見有	將有	可	不可	無	活	用	辞
ふら	めら	○	べく	まじく	らし	べき	かし	ふ
ふて	めて	らん	べく	まじく	と	べら	ふ	も
ふも	めも	らん	べし	まじ	とも	ぶ祢	ども	
ふる	める	らん	べき	まじき	とて	ぶよ	や	
ふき	めき	らめ	べくき	まじくれ	てふ	ぶろう	よ	

右の也行のふらふてなるふきい。變格活良行の屬なていも
ひ抄よ末るてといへるこれなて。漢文よ也まさ矣字とかけ
るたぐひよて。續體言よて受るいいなての引合のなてとい異
ふて。○見有行のめらめてめるめきい。ミえいなてれ引合よて。
變格活良行の屬ふて。○將有行のらんらめい變格活良行の
將然言よてんめと受けたらける辞ふて。○可行のべくべ
しべきべけきい。形狀言久活の屬ふて。○不可行のまじくま
じまじきまじけきい。可行の反對よて。形狀言志久活の屬ふ
て。○らしい結辞の下よいへて。○といい詞玉緒よ。すべて絶定
ことばと續くる辞ふて」とひり。ともとてふといふ引合てへへの

引合ふど此屬ふて。○べゝべらい可行の轉用ゝて。べゝといふゝ大ゝと同ド。○が孫ゞゝい詞玉緒ゝ中昔の言ゝさきゞ孫むこゞ孫ふどい〳〵ると。同ドくて。か孫て其をゝふ儲けて待つ意ふて」とゝふて○ぞゝて。ゝゝゝひ抄ゝ。數有る物。ふゞき物ゝ分際(カギリ)と立て。たゞこゝをゝどこゝもとゞけふどいふ辞ふて」とゝふて。○かゝゝゝゝゝひ抄ゝ。ふとゝて。ゝまゝせゝる事といひて。人ゝ思ゝせゝる辞ふてとゝふて。○ふい禁止辞の下ゝくゝゝくゝゝて。○ゝゝゝさゝ。事といひてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝんとする事をゝゝていふ辞ふて。○やゝ二種ゝふて。その一つゝい問ひゝくるやふてゝふて。ゝゝゝやふどゝて。續體言ゝふて

るゝふゝきゝと。受くゝと。同意ふてゝて此やゝかゝも同ドゝきゝとおもゝへゞ。受るとゝころふ大ふ差異(ケヂメ)ゝる事ゝて。やゝ絶定言ゝふて受け。かゝ續體言ゝふて受るゞ定まてゝり。續用言續體言ゝふてゝゝくゝるやゝ疑のやゝてこゝゝ二種とゝ異ふてゝ思ひ混ふることふゝも其一つゝ歎息のやゝてことゝふてやかひふゝやふどいふ此(コ)ゝて。ロゝ言試(イヒコヽロミ)て。問ゝくゝる方ゝやゝ。ふゞらくその詞て。續體言ゝうつゝゝくゝてかゝと受てその意とさゞむべく歎息の方ゝやゝことゝてゝゝかひふゝゝゝとゝと通(カヨハ)ゝうけて。それ味(アヂハヒ)て知るべくふむ○ゝゝも歎息ゝ辞ゝて。大む孫ゝゝゝゝゝ同ド○ふゝ歎辞ふてつゝゝふゝゝふゝふのふゝてゝゝひ抄ゝ。「人ゝゝひゝくゝる詞ふゞゝ。思ひゝゝてて

いひとは言ふもいふとはは○もい歎辞ふとうをしもうふ
ものもまて。大うさふは同じ。はゆひ抄は。すべてやふもの
三つ心かよふこと多し。古集は通ひて異本はふもる歌はま
さはとはいへは。ふは助辞の下はいふとはいせ見るべし

續體言運用活字					
飽(アク)	著(キル)	起(オクル)			
在	無	活	用	辞	
ふら	か	を	ぞう	から	も
ふは	かふ	よう	だは	まく	て
ふる	かも	が	さへ	ふぐら	ず
ふま	まで	が祢	すら	ふし	ふん
ふま	に	がに	ごと	のを	や

圖得(ウル)

	か	こそ			

右の在行の。ふらはふるはふまい小はは引合はて。變格活
良行の屬ふは。○かは。語のとぢめはおくかはは通ふか
續體言はは受けて係辞とふる。とは異ふは。さて此語の終小おくかは二種
はは。其一つはとひろくくる意はて。はるるふさふふどいへる
かはて。絶定言はは。はは。やふ。やといふと同意ふは。其一つ
はかふは意小通ひて歎息辞とふまるふは。其物其事小はは
て唱へ試ゑまび。その意味ものづらふらるものふは。詞玉
緒は證例ははは挙らまふ。○かふは。上ふる歎息は方はか
まと。此二例は過ざるふは。
はふもぢは重はは引て。一つは結辞とふまるふは。○かもふ

るくいかふの意ゑ用へまど。萬葉集にころまでいかもといふ辞にあてて。かふといいてざあ〜ふあ。後ゑい疑け方の辞とふまあ。この故ゑいひひ抄ゑ。目ゑも心ふも餘まる事とまづかとうさぐひて。やぐてもと詠む（方）る辞とそへたるふあ」といへあ○までい。いひひ抄ゑ。その處まで行き至る心といふふあ」といあ○にい。續用言ゑあ受てふにぬぬるぬもと活くとい異ふあ。いひひび抄ゑ。さすところ中ゑものとやあすゑていふ辞ふあ」といるるるもふあ。○をい此係辞の下ゑいへあ。○ゑあいい。いひひ抄ゑ。物と定めおきて。ろまゑあ出ていふ辞ふあ」といあ。○がいのふ通ふ辞ふあ。いひひ抄ゑ。詞とのべていのといひ。詞の勢きいまる時ゑい

すらトホトハ
ロシカラデ

あむ終ノ辞ニアリ

がといふ」といへあ。○が孫がにい。絶定言の條ゑいへあ。○でふあともお孔〜條ゑいへあ。○だふい續用言の條ゑいへあ○さへいいひひ抄ゑ。「つけ事ふ二つも三つもろひたるをいふ辞ゑあ」といあ。○すらいだふゑ同じ。○ごといい。毎〜ゑ字のこころふあ。○からい。外と待さびして。其物事ゑ上ゑいるといふ辞ふあ。○ふがらい續用言の下ゑいへあ。○ふらしい。にあらしの引合ふあ委〜くい結辞の下ゑいへあ○のこい。續用言の條ゑいへあ。○もはぞもんどさものうら。歌ゑいを〜ゑまぬ事ゑて。多くい文章の方ゑつうへあ。ろい歌ゑ此辞をつうへば。詞つまあて調ひしく。文章ゑ用ふまば。詞ふずうふふあてことふけをばるあ。續紀の宣命ゑい那母といへあ。ふるくいちんといいそざあけらしいひひ抄ゑ。言ふ

べき事と押出して。慥なることを時なり。句の中に有る辞なり。「とあり」やか属れこそれ此七つは上のにと「此二つハ徒に属れ。ちどこそ係辞なり。

既然言運用活字圖	飽著起得	無活用辞
ば		
ぞや		
ど		
ども		
や		

右のぞい。既に然有ることを受けていふ辞にて。將然言より受るばといい。大に意味にかゝる事すてに云へり。○ぞやハ上ふるぞに疑にやれるいもるなり。○どどもの二ツハ。雖の義なり。詞玉緒に此雖の字に意の言に清と濁との差別なり。既に

然る事といふにハどどもと濁り。未然らざる事とならに
よいふにハ。とともと清ていふ。此清濁かよりて。上の受る言
の格も異ふりとなり。○やハ此辞に二義なり。其一つハ疑に
やふりこれにより語に半ふなりて。結辞もその掟とたゞ
へざる事ふり。其一つハ歎息にやふり。こをかよりて。語の終
めか有りて。趣意その辞にて落著する事にて。なもやハなり
よふもやいもりよと。心に味へ知らるしかどの意味ハ。もの
づから知らるゝもにふり。まゝ語の終になるも。疑にやの結
辞といひのこしたるなり。そい此例にならびよく〳〵思ひ
こくべくふん。

指揮辞運用活字圖

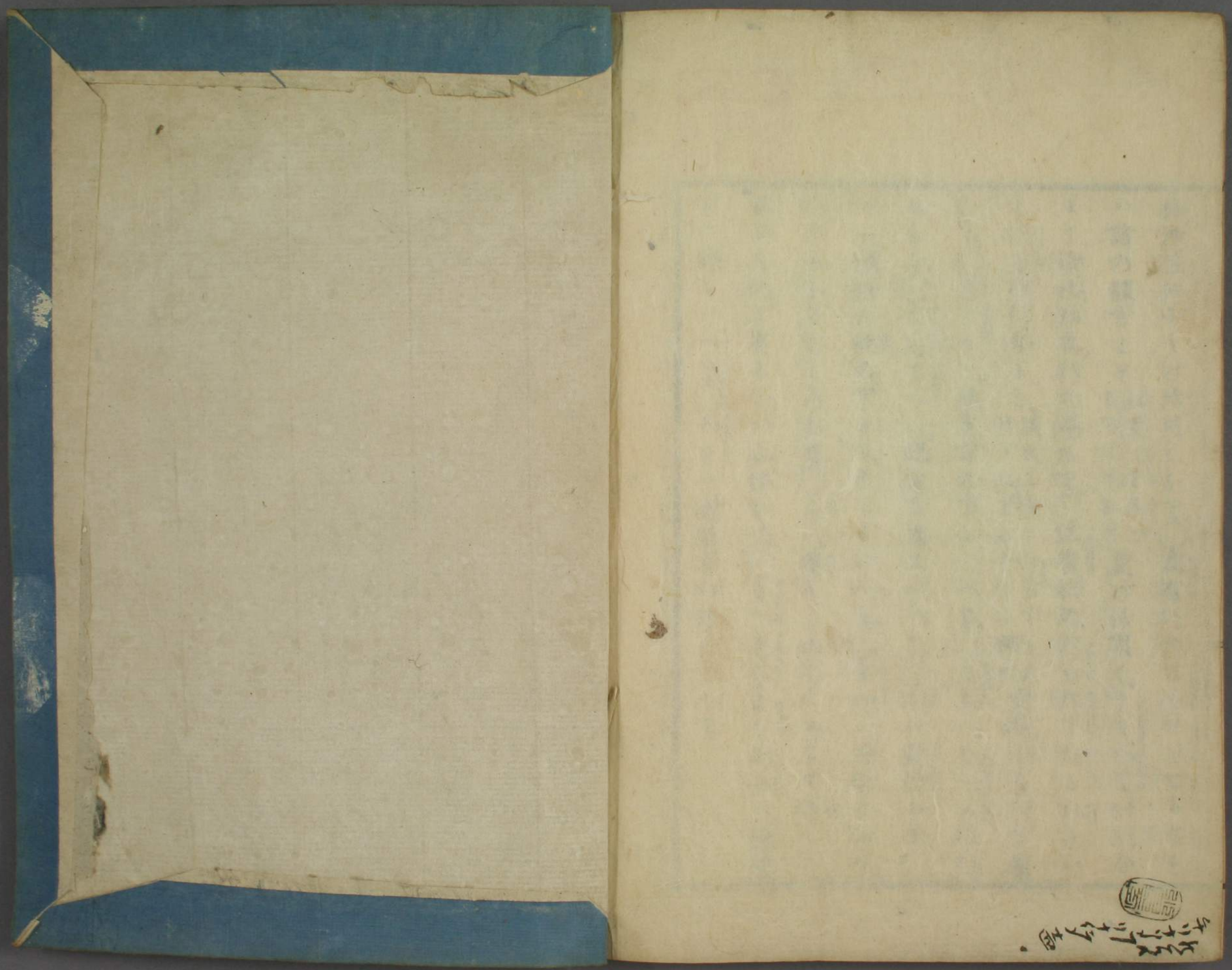
				れめへてせけ	
				うれ きれ けれ	何よ 何ね
無活用辞				と	か〜
				ども	や
				とて	
				てふ	
				て〜	

此ハ四段活まと變格活奈行良行ともと既然言すかいち指揮とふると本よして。一段活中二段活下二段活まと變格活加行佐行の將然言よア。よまと祢と受て指揮とかる辞よア。うけさる辞どもかア。○とともとてふの引合てへの引合かしかど。既と絶定言の條まいへア。○やい。あせい抄と。何よとよめると似て。心いさと打ふるまへるやうよよめりと

ばア。

體言運用活字圖

言					
爲	屬	肯	無活用辞		
せ	せら	たら	と	の	さへ
〜	せア	たア	とも	へ	すら
す	せア	たア	とふ	よ	のみ
する	せる	たる	てふ	や	より
すれ	せき	たき	て〜	ら	から

此ハ諸ミ體言よア。受る辞の大らさふア。中段と言といふ字と書さるハ。そこと入て孰の言をも置べき為。假と志らせるふア○爲行の。せ〜すするすき諸の字どもよア。解ル釋變すふと

格活佐行ふうけ活用(ハタラ)くふ。○爲有行の。せらせ。せる。せも
ハ諸の體言よ。も。せ。せり。ふど紅葉せ。冬ご受け活用く。て。ら。れ引合
ま。て。變格活良行の屬ふ。○止有行の。た。ら。た。た。る。た。き。ハ
と。ら。れ引合ま。て。漢文ま君くたらずと。も變格活良行の屬
臣くたる。ふどいふ類也
ふ。○とともい。絶定言の下ま。い。へ。○とふい。といふの引
合ふ。○てふて。へ。い。絶定言條ま。い。へ。○のい連辞(ツラネコトバ)ふ。○
へ。い係辞の徒の下ま。く。さ。く。い。へ。○よやい。呼びうけて。
いつらふ。ろ。こ。ろふ。○らい。等もどのこ。ろま。て等(ラ)。
並ぶものま。有。ふいふ辞ふ。○さ。へ。そ。ま。よ。か。ら。い。續體
言の條ま。い。へ。○のま。い續用言の條ま。い。へ。